シリーズ 心臓病の医療を志して No.61

喜瀬 広亮

昭和大学病院
小児循環器・成人先天性心疾患センター

この20年間を振り返って

2003年に山梨大学を卒業して小児循環器の診療に関わるようになり、ちょうど今年で20年になりました。この節目で患者さんのお母さんから寄稿の機会をいただきました。人様にお話しするような内容ではないのですが、私の小児循環器医としての歩みを振り返って少し書かせていただきます。

私が医者になった頃は現在のような全科をローテーションする研修システムはなく、国家試験に合格するとすぐに診療科へ配属になりました。学生時代の最後に実習した小児科で、当時は想像もつかないような複雑な心疾患のお子さんが繰り返し治療を受けて退院していくことに感銘を受け、小児科医というより小児循環器医になりたくて小児科に入局しました。

仕事始めの最初の週のことは今でもはっきりと覚えており、生まれたばかりの両大血管右室起始症のお子さんが不整脈を契機に壊死性腸炎になってしまい、上級医から「喜瀬の仕事はこれ」と言われて、明けても暮れても交換輸血を続けました。その後も人工血管が閉塞するなど、重症な患者さんの診療が続き、家に帰る時間もなく連日病院に住み込んでいました。どんなに重症な心疾患でどんな状況にあっても決して諦めずに治療を続ける上級医に惹かれ、その診療に加われている自分に少しずつやりがいを感じるようになり、先天性心疾患の診療にどっぷりと浸かっていきました。気がつくと「いつも患者さんのベッドサイドにいる」という生活が板についていました。

実際の家族よりも患者さんと過ごす時間の方が長く、自分でもどちらが家族かわからなくなっていました（こんな私に今も愛想を尽かさず一緒にいてくれる妻と娘には感謝しかありません）。医者にも働き方改革が始まる現代では考えられない生活ですが、当時の生活が今の私の小児循環器医の基盤を形成したことは間違いないなく、この時期に感じた熱い気持ちが、今後も自分の小児循環器医としての一生を支えてくれるものと思います。

私は大学卒業後、山梨大学附属病院で小児循環器診療をスタートしました。地方の大学病院ですが、ここでは医者に限らず、小児循環器に関わる多くの医療従事者が一丸となって小児循環器診療に携わり、複雑な先天性心疾患、心筋症、遺伝性不整脈といった多種多様な疾患を一手に引き受けていました。多くの職種が一つの小さな命を救うために全力を尽くしていることに非常に魅力を感じ、さらにこの仕事が好きになっていきました。

夢中に仕事をしているうちにあっという間に過ぎた20年ですが、この20年で外科治療も内科治療も進歩し、今では多くの先天性心疾患の方々が成人を迎えることができるようになっています。とても喜ばしいことですが、一方でこうした先天性心疾患の約半数は、年齢を重ねるに従い様々な問題を生じることがあり、生涯にわたり定期的な通院が必要で、「成人先天性心疾患（ACHD）」と呼ばれています。多くの職種と家族の協力のもと、大変な治療を乗り越えてきた方々がこれからも安心して社会で生活できるように、今のチームとともに先天性心疾患の診療をさらに拡充していきたいと考えています。